

監視スタディーズ — 「見ること」と「見られること」の社会理論



- デイヴィッド・ライアン 著
- 田島泰彦 / 小野原みどり 訳
- 岩波書店
- 2011年初版
- 3,400円(税別)

他人からずっと見られていることに気づけば、誰もが思わずひるみ、言い知れぬ恐怖を抱くだろう。逆に、誰からも見られない(見捨てられた)状態に陥ることも恐れるはずである。教育や労働など日常のさまざまな現場における人間関係から中央-地方の関係や日米関係にいたるまで、過剰な同調と依存が蔓延している。また特定領域への関心の集中と(それと裏表の関係にある)社会問題の局所化や放置といった事態が、マスメディアを通じて日本社会の全域を覆っている。見られすぎても/見られなさすぎても、不安から人は孤立と分断に追いやられるのだ。

例えば、社会的弱者や女性から自らの個人情報を利用されることを拒否しようとしても、身体をめぐる情報などはとるに足らないものとして扱われがちである。だが、プライバシーをどう扱うかによってこそ、その社会の質が規定される。本書にあふれている連帯と配慮(ケア)を自他に要請する高い倫理性は、彼女/彼らが社会への信頼をとり戻すための

確かな手がかりとなりうる。住基ネットよりもはるかに「国民総番号制」に近いとされる共通番号制の導入が現実のものとなりつつある中で、本書が刊行されたことの意義は大きい。

社会的振り分け

現代の監視テクノロジーは、「ジェンダー化、人種化されたまなざし(gaze)」を内包しつつさらに強化・拡散させながら、リスク管理やマーケティングの論議から人びとをグループによって等級化・カテゴリー化する。そこで進行する選別・包摂・排除の過程は、人びとの生におけるさまざまな機会や選択に決定的な影響を与えることになる。この社会的振り分け(social sorting)の手段(基準や対象など)については、「見る」側でさえも十分に理解しているとはいえ、きわめて恣意的なものであり、実はそこにこそ権力が発生し、監視が統治技術として機能する余地がある。

著者 田村 元彦 (同志学院大学法学部国際関係法学科准教授)

性別役割分業は暴力である



- 福岡女性学研究会 編
- 現代書館
- 2011年初版
- 1,900円(税別)

性別役割分業と暴力の相関は見抜き難い。「男は仕事、女は家庭」は「自然だ」という考えが根強いからだ。本書は、性別役割分業に内在する構造的、感情的暴力性を可視化し、読者の正しい認識に迫る。

第1に、女性正規労働者の賃金は男性の約6割、女性労働者の6割以上は非正規雇用、女性労働者の7割が出産・子育てで退職、パートタイマーの55%は3号被保険者でうち7割が被扶養者の範囲内での調整就労などの現実を示し、性別役割分業は女性から1人で生きる源を奪うと指摘する。

第2に、夫の82.1%が非継続責任者、家事時間は1日30分以下、子どもとの接触時間は「ほとんどない」が2割強、仕事優先の男性ほどメンタルヘルスを病むなどの現実を示し、性別役割分業が男性の生活権を奪うと指摘する。

第3に、子育て責任の8割以上を母親が担っているなどの現実を示し、幼児期に母親という絶対的存在に支配されたことへの怒りや恨みの感情が、男性に女性に対する嫌悪、恐怖、軽蔑、不信という感情を抱かせ、女性も母親の支配への反感により性別制度を暗黙のうちに支持するという理論を引き、性別役割分業がミソジニー(女嫌い)を生み、

その感情が性別役割分業の維持に働いていると指摘する。

第4に、生物学的性差を根拠とする性別役割分業が、女性を再生産領域に閉じ込め、2010年、妊娠20週の女性が相手男性の要求により経口妊娠中絶薬で堕胎し、女性のみが書類送検された事件が象徴するように、現在もおお、刑法212~216条堕胎罪が女性の身体的自立と健康を閉んでいることを指摘する。

つまり、性別役割分業は物心両面から人間を縛り生存を脅かす暴力なのだ、と胸に落ちる。

暴力

「家庭や一般社会、国家によって行われるあるいは許される身体的、性的および心理的暴力」。性別役割分業の暴力性は母子世界-高齢独身女性世界の貧困率の高さ(2008年OECD平均母子世帯の貧困率第1位)、日本男性の自殺率の高さ(2004年OECD内第1位)に象徴され、子どもの生存までも脅かすという点で「暴力」だと本書は語る。

著者 力武 由美 (日本赤十字九州国際看護大学特任准教授、北九州市立男女共同参画センターコーディネーター)

学生が語る 戦争・ジェンダー・地域



- 星乃 治彦 監修
- 福岡大学文学部歴史学科 西洋史セミ 編者
- 法律文化社
- 2010年初版
- 2,400円(税別)

本書は、近代国民国家が引き起こした植民地支配、ホロコースト、原爆投下など加害責任と被害の傷跡が残るポストコロニアルな世界状況のなかで、「9.11」テロ以降の不穏な世界状況を背景に、戦争体験を持たない現代に生きる大学生が、福岡という地域で、過去の歴史をどう捉え、世界とどうつながっていったらいいのかという難題に果敢に取り組み、「つ」の結晶として「地域」という概念を提示した書である。

まず、「一民族・一国家」を概念とする近代国民国家が、中央集権・資本主義・性別役割分業体制を敷きジェンダー規範を国民統合の名の下に強化し、それから逸脱するものを排除・差別する構造を、そして民族序列化による侵略戦争を正当化する帝国主義を生み出した歴史を再検討し、旧ユーゴなどの民族紛争に象徴される国民国家に内包されたある種の閉塞感、限界を明らかにする。

つぎに、このような閉塞状況にある国民国家を超える概念を模索する上で、中・近世の神聖ローマ帝国、オスマン帝国の「帝国」を再検討し、多様な諸地域をゆるやかに束ねる複合的な政治体制、宗教・民族を問わない多元的な共有システムを持っていたという新たな面に光を当てた。

つまり、グローバル化の進展による人・モノ・情報の自由な移動が中境で画された国民国家の枠組みを揺るがす一方で、空からの黄砂・煤煙、海からのゴミ・放射能など、一因では解決できない問題が山積する現代において、たとえば福岡を日本という枠からはずし、韓国や中国と東アジアという「地域」としてつながら、共通の経験・問題を共有することで共存の道を拓く可能性が生まれるのではないかと大学生は語る。

地域

多様な歴史のベクトルを1つのベクトルに収斂させようとする「国民国家」に対抗する概念。リーマンショック、地球温暖化、原発など一因を越えてつながっている問題を考えるときに重要な概念だとする。1981年、英国グリーンナム・コモンズ軍基地で3万人の女性が起した「人間の鎖」運動は、戦争、原発、支配・被支配の権力関係、資本主義の奥深くまで合理化し、女性に対する差別などあらゆる暴力に対抗し、社会的自由にかかわらず運動が掲げる目標に共鳴した人が国家の枠を越えて集合する非暴力運動で、「地域」の概念を具現化した1つの事例。

著者 河津 いつき (日本赤十字九州国際看護大学2年生)

パパと怒り鬼 — 話してごらん、だれかに



- グロー ダーレ 作
- スズツイン・ニールス 絵
- 大島かおり・高木直子 共訳
- ひさかたチャイルド
- 2011年初版
- 1,800円(税別)

本書はドメスティック・バイオレンス(以下、DV)を主題とした絵本である。主人公の男の子ボイはママと暴力的なパパの顔色を常にくうかがって暮らしている。パパが怒りだすとママはボイを守るため、パパの暴力にも耐えようとする。絵の中でも圧倒的に大きなパパの存在と無力で小さなママとボイの存在が対照的に描かれ、DVの背景にある男女間、親子間の力の不均衡を示している。

物語はボイの視点と声で語られ、ボイが暗い地下室と呼ばれるものが登場する。パパの怒り鬼が住んでいるところであり、感情の起伏が激しいパパと暮らすボイの不安のメタファーでもある。その深い間から、不安がいつわき出してくるか分からない不安定さをボイが常に抱えていることを強調している。十代の私でも親の目や様子はいつも気になるし、親が少しでも嫌味が悪いと無視してはられない。だから、怒るパパと怯えるママの姿をみて暮らす幼いボイの不安な気持ちはよく理解できる。

この絵本は暴力の怖さと同時にボイの困惑も描いている。ボイはなぜパパが怒るのかわからな

い。読み手にも何が原因でパパがママに暴力を振うのか語れない。沈黙は語り手ボイの困惑を強調すると同時に、実は読者自身がDVの問題や加害者の心理をよく知らないことに気づかせてくれる。

物語はボイが主観に手紙を書くことで主観が助けに来てくれるという出来事で終わる。子どもが一人で問題を抱えずに自分の状況を他者に話すことが重要であり、まわりにサポートできる人がいるのだというメッセージを伝えている。この結末はDVにさらされて暮らす子どもたちに問題解決の糸口と望みを与えてくれる。

怒り鬼

ボイがパパの暴力的な顔面に名づけた名前。普通のパパと暴力約なパパを区別するボイの行名は、DV加害者が二面性を持つことをあらわしている。また、暴力を振るうパパに困惑するボイの姿は、DVが暴力として捉えられにくい面を強調している。

著者 山本 志堂 (大阪インターナショナルスクール高校3年生)